

目次

田上時子のエッセイ 子どもを伸ばす誉め方	1
特集 久保樹里さんインタビュー「親子関係回復のために」	2～3
活動報告 羽曳野市すこやかスクールリーダー養成研修について	4
デートDV講座	4
子育てケアアップ支援事業	5
子どもへの暴力防止に必要な4つの力	5
エルコラム⑧	5
リレーエッセイ 浮穴正博/辻充子	6
講座インフォメーション	7
会員の紹介・入会のおさそい	8
編集後記	8

田上時子のエッセイ

子どもを伸ばす誉め方

虐待に至らなくとも、現代の親のほとんどは育児に不安や悩みを抱えている。子どもを取巻く環境も激変している中、子どもの問題も多様化しており、親はスキルを必要としている。現在社会の育児法を伝えたいと、当NPO 法人では親教育プログラム「叩かず、甘やかさず子育てする方法 スター・ペアレンティング」を提供している。

親は子どもの悪い行動に注目して叱責・説教する傾向にあるが、子どもの行動を変える上では逆効果で、スター・ペアレンティングでは、子どものよい行動に注目して「誉める」ことが親の役割でありスキルであるとしている。子どもを誉めることに関する興味深い論文を最近手に入れたので、ここに要約して紹介したい。

アメリカのスタンフォード大学キャロル・ディック教授は、私たちが自分自身の能力や才能に関してどのように考えているのか(たとえば、能力が生まれつきの才能によって決まるのか、後天的な努力によって決まるのか)が、私たちの性格や行動を形作っているという。教授は子どもたちが知力とは生まれつきもので生涯変わらないと考えているのか努力によって変わると考えているのかを調査した。

教授は8歳から12歳の数百人の子どもを対象に、まずは標準的なIQテストを受けさせた。ほとんど

の子どもが良い点数を取った。教授は子どもたちを無作為に2グループに分け、点数の誉め方を二通りにした。一方は「なんて素晴らしい点数。あなたはとても頭がいいのね。」と生まれつきの才能を誉め、片方は「なんて素晴らしい点数。一所懸命努力したのね。」と努力を誉めた。

どう誉めるかが子どもへのメッセージになる。前者は才能や特性は生まれつきで生涯変わらないというメッセージで、後者は成長の可能性と努力の価値を強調するメッセージである。

結果は明白だった。天賦の才能を誉めるメッセージを受けた子どもは用心深くなり弱みが明らかになるような次のテストを受けたがらなかった。これに対して、努力を誉めるメッセージを受けた子どもは新しい挑戦に意欲的だった。さらに難しいテストを受けさせた結果、ほとんどの子どもは点数が悪かったが、頭がいいと誉められた子どもはこの失敗を自尊心が傷付けられたように感じ、努力を誉められた子どもは腰を据えてもっと勉強に励んだ。

親は、子どもの性格や行動や能力を気にするが、そこに至るまでにどのような誉め方をすれば才能が伸びるかにはあまり気を使わない。しかし、誉めるにも工夫があることが分かる。「具体的に、時間が経たないうちに、心を込めて」子どもを誉めよう、とスター・ペアレンティングでは教えている。